モダリティ形式としての「そうだ」について

龐　　黔林

要　約

論作爲語氣表達形式的“そうだ”

龐　　黔林

樣態助動詞“そうだ”由于在接續、形態及含義上與其他判断語氣的表達形式不同，因而其定位尚相當模糊。本文将“そうだ”的根本含義分爲“予想”和“状態把握”，并論證了由于含義不同，其在語氣表達形式中的定位也不盡相同的觀點，導出了“そうだ”具有“状態把握”和“予想”兩種用法，且其間互相連續的結論。“状態把握”這一用法近似現象描寫句，偏向于客觀性；而“予想”的用法則是“証拠性判断”語氣的表達形式，偏向主觀性。兩種含義雖有所區別，但有時較難分辨。這也證明了作爲語氣表達形式的“そうだ”本身在主觀性和客觀性上是連續的這一特點。

1．はじめに

モダリティ（modality）研究の中で、いわゆる様態の助動詞「（し）そうだ」（以下「そうだ」と略す）の位置付けの問題、その中でも特に「そうだ」が判断のモダリティ形式に属しているか否かという問題について、先行研究では、かなり違う見解が見られる。例えば、益岡(2002)は判断のモダリティの下位概念として「真偽判断のモダリティ」と「価値判断のモダリティ」の二種類を挙げ、それぞれの表現形式を羅列はしているが、「そうだ」をどちらに入れるかという点についてははっきりしていないようである。これに対して、宮崎（2000）は「そうだ」を「認識的叙法性（epistemic modality)」の体系を構成する形式として考え、証拠系の判断類に入れている。また、森山他(2000：p.154)は、「モダリティ形式の中に入れるにしても、「(シ)ソウダ」は、もっとも周辺的なものである」と述べている。

このような位置付けの差異があるのは、「そうだ」が形態上、他の判断のモダリティを表す形式と随分違うためであろう。「ようだ」「みたいだ」「らしい」のような表現は判断のモダリティ形式として多くの研究に認められている。これらの表現は動詞の辞書形の後にも過去形の後にも接続でき、話し手の現在、未来、または過去の事柄に対する判断を表すことができる。しかも、これらの表現には対応する否定形式がない。これに対して、「そうだ」は動詞の連用形、形容詞及び形容動詞の詞幹につき、過去の事柄に対する判断を表すことができない。また、「そうだ」には、「そうにない」「そうもない」「そうではない」など、幾つかの否定形式がある。このような形態上の特徴により、「そうだ」を単純なモダリティ形式としてではなく、接尾語的な存在として位置付けようとする議論も見られる。ところが、「そうだ」には、話し手の事柄に対する推測的判断を表す働きもあるので、その位置付けが更に複雑になるのである。

「そうだ」の位置付けの問題について考える際、まずモダリティについて考え、そして「そうだ」の基本的意味をはっきりさせなければならないと思う。

2．モダリティを考える時の立場

モダリティというのは何か、この問題について今では文法学者の間で認められている観点はまだないようである。モダリティの定義だけについても、従来の研究は二つの立場に大きく分かれていると思われる。一つは主体的な側面、つまり文の事柄的内容に対する話し手の心的態度といった立場であり、もう一つは客体的な側面、つまり文の事柄的内容と現実との関係とか、主語と述語との関係のありかたといった立場である。前者は主観性を重んじ、話し手の立場から文の事柄的内容を見ており、後者は客観性を重んじ、客観的な立場から文の事柄的内容と現実との関係を見ているのである。立場が異なると、無論モダリティについての定義や、下位概念の規定（例えば、「判断のモダリティ」など）に対する見方も違ってくるのである。

この二つの立場のうち、一つだけをとってモダリティについて考える研究は少なくない。仁

田（1991：p.18）は「＜モダリティ＞とは、現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現である。」と述べ、主に主体的な側面からモダリティを捉えている。益岡（2002）はモダリティの下位概念――判断のモダリティ――が「現実の世界と非現実の世界との対立を基軸とする」と述べ、主に客体的な側面からモダリティについて考えているのである。

しかしながら、この二つの立場は二者択一的な関係ではなく、連続的に見るほうがいいだろうという考え（森山他 2000）もある。また例えば、藤城（1997）は「現実界に対する想像の世界、確認に対する未確認」という二つの異なった要素を軸に判断のモダリティを考察してみた。「現実界に対する想像の世界」とは現実と文の事柄的内容との関係であり、「確認に対する未確認」とは話し手が文の事柄的内容に対する心的態度なのである。このような考察により、主観性と客観性が統合されているのである。

主観性と客観性との連続は、「そうだ」を分析するにも役立つものであると思われる。

3.「そうだ」に関する先行研究

従来の先行研究では、主に「そうだ」の用法分類とか、「そうだ」の前に来る言葉の性質とその意味との関連などについてのものが多いようである。

寺村（1984）は、「そうだ」は接続のし方では他の助動詞、「ようだ」「らしい」などと違いが見られるが、他の点では共通する点が多いと指摘し、これらの助動詞を合わせて「概言のムード」の表現形式と見ている。また、「そうだ」の意味を「予想」と「予感」の二語でまとめ、その説明として「ある対象が、近くある動的事象が起こることを予想させるような様相を呈していること、あるいはある性質、内情が表面に現れていることをいう表現である。そのどちらであるかは、主としてそれがどの種の動詞、形容詞につくかによって、そして付随的に文脈、状況によってきまる。」（同書：p. 239）と述べている。

寺村以来の研究の中では、「そうだ」の二つの意味の中で、「予想」を「出来把握様相」、「予感」を「状態把握様相」と呼んでいる議論もある（森山他 2000）。普通、前に動作動詞が付く場合は前者の意味が表れ、前に形容詞、形容動詞または状態動詞が付く場合は後者の意味が表れるとされている。例えば、

（1）このリンゴ、とてもおいしそうだ。　（森山他 2000より）

（2）僕のほしいものはあの店にありそうだ。

（3）あっ、雨が降りそうだ。

では、文（1）、（2）の中の「そうだ」は前にそれぞれ形容詞「おいしい」と状態動詞「ある」がきて、「状態把握様相」の意味を表している。つまり外への現れを通して、物の特性、状態を捉えるのである。一方、文（3）では、「そうだ」は前に動作動詞「降る」がきて、いわゆる「出来把握様相」、つまり出来事態を予想させる様相を表しているのである。

モダリティの表現形式について、従来の研究は判断のモダリティ形式を「蓋然性判断」を表

すものと「証拠性判断」を表すものに分けるものが多い。「蓋然性判断」、つまり事態が成り立つ蓋然性（確かさの度合い）を表す形式としては、「～にちがいない」「～かもしれない」が挙げられ、「証拠性判断」、つまりある徴候や証拠から事態の成立を引き出す判断を表す形式としては、「ようだ」「みたいだ」「らしい」などが挙げられる。「そうだ」を判断のモダリティ形式と見なした研究では、普通「そうだ」が「証拠性判断」を表すものと見られている。これは話し手が「そうだ」を用いて、いつも自分の感覚（視覚、聴覚、触覚など）を通して、物の外への現れを捉えてある推測的判断を下すためでもあろう。

筆者は「予想」と「状態把握」の二点に着目し、「そうだ」の基本的意味を分析したうえで、「そうだ」に現れている主観性と客観性との連続を覗いていきたいと思う。

4．モダリティ形式としての「そうだ」

4.1 「そうだ」の基本的意味

前にも触れたように、「そうだ」の前にくる言葉の性質によってその意味も違ってくると主張する議論が多いが、「そうだ」の意味を影響するもっと重要な要素は前接した言葉の性質ではなく、話し手の心的態度なのであると思われる。つまり、重要なのは話し手がただ単純に物の外への現れ（状態）を述べるだけなのか（本文ではこれを「状態把握」と呼ぶことにする）、それとも物の外への現れに基づいて自分の推測的判断を述べるのか（本文ではこれを「予想」と呼ぶことにする）ということなのである。例えば、

（4）この金魚は死にそうだ。　（寺村 1984：p.241より）

（5）（自分の身体の調子について）腹がへって死にそうだ。　（同上）

この二文では「そうだ」の前に共に「死ぬ」という言葉が付いている。文（4）は金魚の今の状態を観察した上で、「まもなく死ぬだろう」という事態を推測することが表せるが、文（5）では話し手がただ自分が今どんな状態であるかを単純に述べているだけであろう。宮崎(1993)は、「そうだ」は「外観的な判断を表すため、判断の主体となる人物と、判断の対象となる人物とは、必ず別人でなければならない」と述べている。それなら、文（5）では判断の主体となる人物と、判断の対象となる人物が共に話し手であることはどう解釈すべきだろうか。寺村(1984) はこれが「客観的な様態の表現を自分のことにいう誇張した表現」に過ぎないと主張している。これは一つの特殊的用法ではなく、「そうだ」が元来持っている用法の一つ――「状態把握」なのであると筆者が思う。この種の用法は実は少なくない。次の文について考えてみよう。

（6）（花瓶がテーブルの端からはみ出ているのを見て）花瓶が落ちそうだ。

（中村 2000より）

森田（1990）は文（6）のような「そうだ」の用法を「寸前」と呼んでいるが、花瓶がテーブルの端からはみ出ている場合、二つの可能性が考えられると思う。というのは、落ちる寸前でもありうるし、ずっとその状態を保って落ちない可能性もありうるのである。文（6）は話し手が眼前の状態により花瓶が落ちることを推測していることも表せるし、ただ花瓶がテーブ

ルの端からはみ出ている状態を述べていることも表せる。つまり、話し手が現実の事柄をどう把握するかという心的態度は「そうだ」が「予想」を表すのか、「状態把握」を表すのかを決めるのである。文（5）は、判断の主体となる人物と、判断の対象となる人物は共に話し手であるため、ある外観的な状態に基づいて自分の推測的判断を述べる「予想」を表すことができなく、自分の状態を単純に述べる「状態把握」を表す用法なのであると思われる。

「そうだ」の「状態把握」という用法では、話し手がただ事柄の外への現れ（状態）を述べるから、その働きは「アスペクト（相)」と近い。例えば、

（7）後ろの荷物が落ちそうだ。

という文は

（8）後ろの荷物が落ちかけている。

と理解してもいい。こういう場合、話し手がある外観的な状態に基づいて推測的判断を下しているとは言いかねる。（7）のような文の働きは仁田（1989）で述べられている「現象描写文」と似ている。つまり、話し手がある現象を聞き手に伝えるだけである。このとき、「そうだ」は判断のモダリティ、更に言表事態めあてのモダリティから離れ、発話・伝達のモダリティのほうに偏ってしまうのである。

「そうだ」のもう一つの用法――「予想」は主に話し手が事柄の外への現れを捉えることにより、ある種の判断を下すことを表す。「そうだ」は、動詞に付く時連用形にしか付かないため、すでに発生した事柄に対する判断を表すことが出来ない。従って、筆者は寺村（1984）の言葉を援用し、こういう用法を「予想」と呼ぶことにしたのである。「予想」は動作動詞の場合、ある事柄の発生を予測することを表すが、形容詞、形容動詞と状態動詞の場合、「予測」というより、「推測」を表すという方がよい。つまり、事柄の外への現れに基づいた話し手の推測的判断を表すのである。先行研究で「証拠性判断」と見なしているのは「そうだ」の「予想」の用法なのであると思われる。話し手の判断の証拠になるものは、通常の視覚、聴覚、触覚などの感覚器官から得たものを除いて、事柄の性質及び常識などからも得られる。例えば、

（9）「しかし年上の女の人ばっかりに囲まれて、変な男に成長しそうだな。」

『アムリタ』

(10)「今から、こんなにおっちょこちょいじゃ、大変なお母さんになりそうだわ」

『幸福な朝食』

(11)〔店頭で商品のコートを見て〕このコートは僕にはどうも小さそうだ。

（菊地 2000より）

(12)〔機上から、下の村を見て〕戸数は百戸ぐらいはありそうだ。

（菊地 2000より）

(13)〔地方で標準語を話す人のことを〕地元の人ではなさそうだ。

（菊地 2000より）

文（9）と（10）は眼前の状態に基づいて、将来ある事態の発生を予測することを表しているが、文（11）～（13）では「小さい」「ある」「ない」のような状態を表す言葉が「そうだ」の

前に来て、話し手の推測的判断を表しているのである。

4.2 「そうだ」の否定形式と意味との関係

「そうだ」には、「そうに（は）ない」「そうもない」「そうにもない」「そうではない」など、幾つかの否定形式がある。動詞を前接する時、これらいずれかの否定形式も使用可能であるが、「そうではない」は他の否定形式とは幾分違う。例えば、「降りそうに（は）ない／降りそうもない／降りそうにもない」と比べると、「降りそうではない」は「状態把握」の意味を表すことが多い。例えば、

(14)〔出掛けに空を見て傘を持って行こうとする夫に、家の中から妻が〕
「雨が降りそうなの？」
「いや、降りそう（というわけ）ではないんだけど、ちょっと曇っているんだ」
（菊地 2000より）

では、夫が言いたいのは「雨が降る可能性がない」という予測ではなく、「空は雨が降ると思われる様子を見せていない」という状態なのであると思われる。他の否定形式――「降りそうに（は）ない／降りそうもない／降りそうにもない」――は話し手が空の様子から雨が降る可能性がないと予測していることを表すことが多い。動詞を前接する時の「そうではない」という否定形式は認められないこともあるが、これは「そうだ」が動詞を前接する時、常に「予想」の意味を表し、他の否定形式がよく用いられるためであろう。しかし、これで「そうだ」の「状態把握」の意味を認めず、さらに「そうではない」の否定形式を認めないわけにはいかないと思われる。

形容詞または形容動詞を前接する場合、否定を表すには「そうではない」の形がよく用いられる。これは通常、形容詞と形容動詞が状態を表しているためであろう。こういう場合、「そうだ」は「状態把握」の意味を表すことが多い。つまり、ある物がある種の性質を持つと思われる状態を呈しており、話し手は「そうだ」を用いて、自分がそういう状態を把握したことを表す。否定の場合、「そうではない」はある物がある種の性質を持つと思われる状態を呈していないことを表すことになる。例えば、

(15) たとえば私が何週間も外国に行ったりして異国の空の下で母を思い描く時、どうしてか母は優しくもなく、笑ってもいない。……そのことに怒っているわけでもなく、哀しそうでもない。『アムリタ』

の中の「哀しそうでもない」は、母の顔には悲しいと思われる表情を呈していない、話し手がそれと把握したことを表しているのである。

否定形式の意味上の区別も「そうだ」には「予想」と「状態把握」の二種の意味を持っている証拠と言えよう。

4.3 「そうだ」における主観性と客観性の連続

「状態把握」の用法では、話し手が現実における事柄が呈している状態を描写している。こ

ういう場合、描写された対象に主眼が置かれ、その対象と現実における事柄との関係が表れ、客観性に偏っているのである。これに対して、話し手が事柄の呈している状態をもとに自分の推測的判断を述べる「予想」の用法では、話し手の現実に対する認知が表れ、主観性に偏っていると言えよう。

前掲文例（6）のように、「そうだ」が一つの文の中で、二通りの意味が解釈できる場合がある。どちらの意味を表しているかは文脈により話し手の心的態度から考えなければならない。この判断の難しさも「そうだ」に主観性と客観性が相連続していることを表していると思われる。次の二文を比べてみよう。

(16)「このケーキ、おいしそうですね」　（中村 2000より）

(17)「アメリカ人って、ご飯にドレッシングかけて食べるらしいよ」
「なんか、まずそうだな」　（中村 2000より）

この二文は視覚と聴覚また想像においての区別だけではない。文（16）は場面を設定しないかぎり、「状態把握」と「予想」の両方が解釈できるが、文（17）は「予想」としか解釈できないと思われる。したがって、「状態把握」と「予想」は断然に分かれているのではない。同時に両方とも解釈できる文もあるのである。

次に、「そうだ」が連体修飾、連用修飾として文に現れる時や、否定形式、疑問形式、または過去形で現れる時などについても検討してみよう。

通常、モダリティ形式が元の形のまま文末に現れる場合、事柄的内容に対する話し手の発話時の心的態度及び伝達態度を表すと見られている。これに対して、連体修飾、連用修飾や、疑問、否定、過去乃至複文の一部などの形で文に現れると、話し手の発話時の心的態度や伝達態度を表さないことになる。しかし、この場合、モダリティ形式の基本的意味を失うわけではなく、まだ残されていると思われる。「そうだ」も同様である。「そうだ」は他の形で現れる場合、事柄が呈した状態を表すことが多い。例えば、

(18) 花嫁の父は、微妙な表情をしていた。泣きそうなのでもなく、暗いわけでもない。（連体修飾＋否定）　『アムリタ』

(19) ぼくは泣き出しそうになっていた。（連用修飾）　『五千回の生死』

(20) 山下というその青年は、ちょっとまぶしそうな顔をした。（連体修飾）『アムリタ』

(21) 同じ家の中で私がこんなふうに浮かれ暮らしているのに、母がつらそうだと悲しい。（複文の一部）　『アムリタ』

などがその例であるが、中でも特に文（18）、（19）は、「泣く」のような動作動詞でも「そうだ」と一緒に連体修飾語として文中に現れると、「予想」を表すのではなく、「状態把握」の意味になるのである。

しかし、「そうだ」が他の形で「予想」を表すものはないとは言えない。次の文はみな「予想」の用法であると思われる。

(22) たいして大きい町じゃないから、弟のいそうなところはすぐわかった。（連体修飾）　『アムリタ』

(23) (妻が刑事の夫に事件の捜査について尋ねた)

「難しくなりそうですか」

「わからん」(疑問形式)　『返事はいらない』

(24) 一時まであと四十分あった。四十分で話終えることは出来そうにないからと断わったが、……(否定形式＋複文の一部)　『五千回の生死』

(25) そこから家に帰るには、まだ二時間近くかかりそうだった。(過去形式)

『五千回の生死』

要するに、「そうだ」の「状態把握」と「予想」との二つの意味は区別して考えるべきであるが、連続した見方で考えるのもまた必要である。

5．おわり

本稿は、モダリティについて考える時、いわゆる様態の助動詞「そうだ」をどう見るべきだろうか、また、「そうだ」はモダリティ形式として認めるならば、ある特定のモダリティ形式と見ていいだろうか、という問題について検討し、次のような結論を導き出した。

「そうだ」は簡単にモダリティ形式から排除すべきでもないし、単純にある特定のモダリティ形式(例えば、「証拠性判断」など)を表す形式と見ることもできないと思われる。「状態把握」と「予想」という基本的意味により、「そうだ」は二種類のモダリティを表すことが出来ると思われる。「状態把握」と解釈する場合、現象描写文に似たモダリティとして、事柄の外への現れの描写を表し、客観性に偏っているが、「予想」と解釈する場合、証拠性判断を表すモダリティとして、話し手の事柄に対する推測的判断を表し、主観性に偏っているのである。この二つの意味を持っているということ自身は「そうだ」に客観性と主観性が相連続していることの現れであると思う。

用例の出典

乃南アサ,『幸福な朝食』, 1996年, 新潮文庫
宮部みゆき,『返事はいらない』, 1994年, 新潮文庫
宮本輝,『五千回の生死』, 1990年, 新潮文庫
吉本ばなな,『アムリタ』, 1997年, 角川文庫

参考文献

菊地康人, 2000,「いわゆる様態の『そうだ』の基本的意味」『日本語教育』107, 日本語教育学会
寺村秀夫, 1984,『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』, くろしお出版
中村　亘, 2000,「『ようだ』『らしい』『そうだ』をめぐって」『早稲田日本語研究』8, 早稲田大学国語学会
仁田義雄・益岡隆志, 1989,『日本語のモダリティ』, くろしお出版
仁田義雄, 1991,『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房
藤城浩子, 1997,「『判断のモダリティ』についての一考察」『日本語教育』92, 日本語教育学会
益岡隆志, 2002,「判断のモダリティ—現実と非現実の対立—」『日本語学』二月号, 明治書院

宮崎和人，1993，「『～ダロウ』の談話機能について」『国語学』175，国語学会
宮崎和人，2000，「ムードとモダリティ」『日本語学』19–5，明治書院
森田富美子，1990，「いわゆる様態の助動詞『そうだ』について」『東海大学紀要』10
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩，2000，『日本語の文法3　モダリティ』，岩波書店
楊　凱栄，1990，「様態助動詞『～ソウダ』とそれに対応する中国語の表現」『日本語教育』72，日本語教育学会

（原稿受理　2004年3月27日）